

第 92 話〈避難小屋〉の要約と参考資料

第 92 話〈避難小屋〉の要約と参考資料

反射炉の煙害に襲われた「向土呂久」は避難小屋を建てて引っ越しました。そこで生まれたツルさんは、子どものころ反射炉跡でままごとをして遊びました。いっしょに遊んだ友だちが急死、親からきつく叱られました。つらい思い出を、いま訪ねてくる学生たちに語ります。

第 92 話〈避難小屋〉の要約と参考資料

9 2 - 1 中島による向土呂久の土地の買収

佐藤仲治さんの話（1977年5月14日聴取）

二番坑があったところから反射炉につづく谷の南側は向土呂久の土地。川べりには田が1反あった。中島がここを欲しがっているというので、和合会は「売るときは和合会に相談してくれ」と伝えていた。向土呂久の啓三郎さんは田畑を開いたが、子どもがおらんので、竹松さんの弟の茂を養子にもろうた。竹松さんが鉦山に働きに行きよった。鉦山の者が「弟の土地を売ってもらうごと相談してくれんか」と智恵付けた。竹松が茂のところに行って、茂が納得したもんじゃから、鉦山が土地を買った。そのあと和合会はもめた。

「なし、あそこの土地を売ったか。必ず窯を造るにちがいない。和合会に相談してくれと言っていたじゃないか」。その土地に反射炉が建った。ここを手放してから、向土呂久に行く細い道より下、土呂久川との間の田畑を全部売った。中島は「疎水通洞（そすいとうどう）」という坑道を向土呂久の馬屋の下から掘った。反射炉の下まで抜いた。大切坑と疎水通洞の落差は100尺ある。大切までポンプで上げんでも、疎水通洞から水を抜けば、下のほうの鉦石も掘れる。ついでに、鉦滓を川べりに捨てた。戦後、農地解放で弘さんが土地を買い戻したあと、鉦滓を広げて田をつくった。それで稲の育ちが悪く、試験田になっている。

向土呂久には7～8反の田畑があったが、反射炉に1反の田、疎水通洞に2反の田と2反の畑を売って、残りは向土呂久の家の前の道路より上の畑3反くらいになった。この3反の畑に、茂さんは研瀬から通ってきて作物をつくった。

茂さんは田を売ったあと、その代金を十市郎さんや落立の農家に貸して、100円にモミ6俵くらいの金利をとっていた。耕地をつくらんでん、食用の米はあった。鉦山の害を受けて土地を売った。私たち（荒地）のように害のある土地で作物をつくると、4反の水田にモミ2俵といった有様。それに比べると楽だった。

92-2 連絡所

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P148~149

選鉱された鉱石が、東岸寺から索道で運ばれてくる。反射炉より15メートルくらい高い斜面の上に連絡所があって、選鉱場から送り返された鉱石な、ここでみな降ろした。連絡所に着くと、搬器はワイヤからはずれてレールに移る。平の際で搬器の耳のピンをはずすと、くらくらと返って、女がスコップで鉱石を下に落す。40度の斜面に垣板で漏斗がつくってあり、粉の鉱石は反射炉のもとまでずり落ちた。反射炉の後には、3尺に1間の3分鉄板が2枚ぶらさげてあったがよ、これが壁の役目をして、鉱石はそこに野積みされた。反射炉の天井に直径が5尺くらいの円型の漏斗があった。梯子を昇って、そのふたをあけち、反射炉の室へ粉鉱をサラサラと流し込む。炉の全面の3ヵ所のまぜ口から棒をさし込んで、焼けぐあいを見ながら鉱石をつくじった。

部落ん衆には「ハンシャロウ」の正体が、どうもわからざった。おかしなことに、こん窯には亜砒酸を採集する収砒室がねえ。粗製炉には、鉱石を焼いた煙を冷やして亜砒酸をとる1号窯、2号窯、3号窯と呼ばるる部屋がある。ところが反射炉には煙突が立つとるだけで、亜砒を集める装置がないんじや。鉱山の幹部な、錫を他の鉱物と分離精製するために反射炉を築いた。比重選鉱した精鉱を反射炉で焼くと、硫黄分は亜硫酸ガス、砒素分は亜砒酸になって、煙といっしょに逃ぐる。焼き殻中の鉄分は磁石で吸い着けて、あとに残った錫をとるのを目的にしたらしいの。目的が亜砒酸でないからちゅうて、亜砒をそのまま煙突からまき散らされては、部落の者がたまらん。被害のいちばん激しかったとは、反射炉に近い「向土呂久」と「神地」じや。野菜や果樹に、白い斑点が付く。よう見ると、これが亜砒酸の粉でな。阿蘇が噴火したときに火山灰が降ってくる。色が違うだけで、あれとちとん変らん。

92-3 反射炉による向土呂久の被害と引っ越し

佐藤サミさんの話（1979年3月4日聴取）

反射炉の被害がいちばんひどかった。茶の葉、芋の葉に、白く亜ヒの粉がたまりよった。そんなところは恐ろしいけ、摘まんかった。雨が降ったら摘んだりしよったけど、みなはとれんかった。白くついて乾きよったけね。田んぼ9畝ばかりあったが、鉱山のためにできんごとなつたけやめた。

子どもが死んでしまうもんじゃけ移った。常義さんところ（研瀬）に4年おって、向土呂久に帰ってきた。「母屋」のツルがあそこで生まれた（昭和15年5月10日）。常義さんところ行ってすぐでした。私たちは土地を買って家をつくった。だいが鉱山に言ったんですけど、鉱山は金を出さんかった。

むこう行っているとき、米はできんかったから、大豆だのトーキビ、イモとか、ここに通ってきてつくった。麦もなにも枯れよったですけね。どしてん、田畑を荒らすわけいか

ん。帰りたくなかった。煙は出よったが帰ってきた。

向土呂久に比べれば、研瀬はほんの小屋くらいのものでした。5, 6人おりました。啓三郎さんなんか死んで、茂とサミの親子くらい。

佐藤数夫さんの話（1977年6月聴取）

向土呂久の草場がだめになった。はえるのははえても、色が赤くなってしまう。

昭和11年ごろ、葉に白い粉がついて、食べさせられん。牛がごろごろ死んでしまった。それで、尾曾宇山（青毛とも言った）を草場ににしたが、1里もかかった。新窯のとき、椎茸を入れたが、ここは出なかった。

佐藤数夫の話（1978年1月28日聴取）

研瀬に母屋の畑があった（茂の姉が母屋の一蔵の妻という関係）。かなりの人数で引っ越した。家族ぐるみ、牛も引いて行った。母屋の「青毛」を借りて、そこに育った草を飼料にしよった。煙はこんようになったが、同じ用水の水を飲んでいて、田畑は向土呂久に通って、米もできるだけ作り、畑はトモロコシだけ。陸稲をちいっと作ったが、できんかった。

佐藤ミキさんの話（1980年3月聴取）

研瀬だけでなく、来さんとこの斜め上になるところへも引っ越した。小屋みたいなものをつくって。研瀬とどっちが先じゃろかな？ じいさん（啓三郎）とばあさん（マト）を向土呂久に置いて、夫婦と子どもを連れて、来さんとこの上に引っ越したように思う。煙が子どもに悪い。育てられる環境じゃなかった。咳するやら、風邪をひくやら。

佐藤ツルさんの話（2021年1月9日電話で聴取）

研瀬より先に、十市郎さんとこの上に移ったということじゃった。反射炉から100メートルも離れてなかったからね。煙がひどくて、三郎さんが2歳か3歳で死んだので、ここにいたら、子どもが死んでしまうち心配した。牛も死ぬし、作物も育たんし、田んぼはダメになるし。田んぼを客土したあとも、土をひっくり返せば毒が出てくるから、田んぼはもうダメじゃね。

向土呂久の移転を整理すると、

最初に、畑中の「白石」の上に転居

1. 疎水通洞を抜き始めた時期
2. 三男三郎の死（昭和13年2月5日）の前後

以上から、昭和13年と考えられる。

その後、研瀬に家を建てて移った

3. そこでツルが生まれる（昭和15年5月10日）

再び向土呂久に戻った時期

1. 4年間研瀬にいた
 2. 戻ったときは、まだ煙が昇っていた
 3. 索道の鉄柱を撤去したとき、赤ん坊が向土呂久の家に寝ていた
- 以上から、昭和15年後半～16年の前半と推測できる。

92-4 向土呂久の分家の被害

佐藤一二三さんの話（1979年3月4日聴取）

煙の行くところははっきりしとった。いちばん先が黒煮えしたごとしているから。木の葉にたぎった湯をかけたら、赤くならんで黒くしぼんでしまうでしょうが。青黒くなって、ポトポト落ちてから、じゃき、夏がいちばんよう被害がわかった。

ここあたりは牛がいちばんよう知っちゃったですわ。夕（ゆんべ）、砒鉍を窯に入れたな、とわかる。夜、焚きつけるときは、煙突の笠ものけて焚くでしょう。その煙が流れ下るから、牛なんかクセクセして鼻だれ、よだれを落としよったですよ。うちは牛は1頭しか死ななかつた。だけど5, 6頭は、やせてくれば4円でん、5円でん、10円でんバクロに売りよった。獣医にみせたって、なんで悪いか言わん。じゃが、よだれ、鼻だれでわかる。不自由しながらも、立宿へんに預けておいて、5月の田植えや秋の刈り入れのときに引いて帰る。1週間もおいておくと、餌を食わんから、「こりゃぼくじゃ」ち連れて行きよった。牛がいちばんよう知とった。人間まで垂ヒで病気するとは知らざった。私は、ずっと小さいときから気管支炎だったのに……。

野菜が使われん朝があつた。味噌おつゆに入れようかなと思うと、母のユクノが「おつゆはたかれんばい」と言うことがあつた。ここへんは火山灰（ヨナ）が降ってくるじゃないですか。垂ヒの黄色い粉が煙とつれのうてから、ここ辺まで落ちてくるじゃないですか。

うちの父（忠行）が二男じゃから、田んぼも畑もなかつた。砂太郎さんと請負師で、鉍石だしの仕事を人つこうてしよった。昭和1年か2年ごろ、鉍山やめて、それから農業を始めた。田んぼが買えるようになって、畑中に田をもった。畑は立宿の上、南のずっと下を行つたところにある。ここ（家の近く）の田は1反3畝、やっとな斗くらいのモミをつけたことがある。そのまんま田をやめて麻をまいたり、野稲を植えたりするだけで、思うごと作はできざったです。

92-5 向土呂久の家系

墓碑からみた死亡年月日と享年

いちばん古い墓石

宝永元年8月4日=1704年、古くからある家だとわかる

系図がたどれるのは、

才蔵（安政6年8月25日、75歳）→鶴弥（慶応4年12月19日、49歳）→繁弥（明治33年3月28日、58歳）→啓三郎（昭和10年4月14日、58歳）→養子・茂（昭和38年12月3日、63歳）

*佐藤茂は、昭和39年12月5日（62歳）に肺癌で死亡（佐藤内科）

*茂とサミ夫妻の三男・三郎は昭和13年2月5日に2歳で死亡

*茂とサミの四女・ツルは昭和15年5月10日生まれ、八女しずえは昭和23年3月17日生まれ、五男・逸志（いつし）は昭和25年2月11日生まれ。

*分家の忠行は、啓三郎の弟。

佐藤忠行

墓碑に書かれた挽歌

かな山に槌ふりし汗のしづくこそ孫子の生る泉なりけり

泉福寺 非宝詠

昭和20年4月18日、61歳

佐藤サミさんの話（聴取日不明）

（忠行さんは）川田時代に三番坑で焼きよらした。声がでらんかった。インド人より黒いごとあった。「もがさ面」というて、ホーソーにかかったようで、でこぼこ。亜ヒ吸うたもんは、20年くらいたんと皮膚にでらん。

佐藤一二三さんの話（1979年3月4日聴取）

父（忠行）は60で死んだ。土持医院の診断書には「悪性感冒」ち書いてあった。この騒動が始まったころ、土持さんが「忠行さんたちのような身体だったら、亜ヒが害しとる」ち話しよった。

土持栄士の法務局調査書（1971年11月26日）

（佐藤一二三の父親の）忠行は、鉱山従業者で肝臓も患っていましたし、脳出血で死亡しましたが、鉱害による被害者の一人であったのではないかと考えていますが、一二三については、なんともいえません。

佐藤弘さんの話（1980年7月26日聴取）

うちの親父（茂）よりか被害を受けていた。亜ヒ焼きをして、声もなんも出らんかった。死なす前は。反射炉が建っても、移動せずにここにおらした。

